

## 4. 遠隔学習において学習を継続するということ：その基盤と実際

高橋 秀明

### 1. 問題

高橋（2001、2002）は、遠隔学習の過程を記述することの意義を考察し、webおよび放送によるコースでの学習過程を、主に受講生自身のビデオ記録と受講生へのインタビューに基づいて記述した。本論では、その記述の結果明らかになった、学習を継続することの意味や意義について、学習者や教授者および経営者や施政者へのインタビューや訪問調査による追加データをもとにさらに検討することを目的とする。

### 2. 公開学習・遠隔学習の政治学

高橋（2001、2002）で検討したように、教授学習の過程は、学習者・教授者・メディアが関係する政治的な過程である。

従来の学校での教授学習は、学習者を選別し、教授学習の時期や時間、内容、場所、方法やメディアを限定するという思想に基づいている。これに対して、公開学習とは、「いつでもどこでも誰でも何でもいかにようにしても」学習できる、という意味で、完全な平等思想を実現することを理想としている。このような意味で、放送大学の「学びたい、それが入学資格」というキャッチフレーズは、学習者の制約を取り払っているものの、公開教育の理想からは遠いものである。

遠隔学習とは、この内「どこでも」学習できるもので、学習場所の制約を取り払ったものと言うことができる。これに伴って、学習時間の制約が取り払われる事例も多い。

このように公開学習が完全な平等思想に基づいているとすると、公開学習が成立するためには以下のような前提が必要となる。

- 教授者・学習者ともに合理的に行動できる
- 教授者・学習者ともに努力をする
- 教授者は学習者に寛容である
- 学習者は教授者を信頼する

しかし、少なくとも学習者にはこれらの前提を認めることはできない。唯一、学習についての事後の評価において、学習者にこれらの前提を認めることができる可能性があるのみである。よって、学習者にとって、学習を継続することは、本質的に困難なことである。

### 3. 日常生活における（遠隔）学習

教授学習過程が、日常生活に位置づけられることは論を待たない。教授者も学習者も、日常生活を営みつつ、教授学習の活動を行っている。この内、教授者にとっては、教授の活動は生活の糧を得るための「仕事」であることがほとんどであるが、学習者にとってはむしろ「仕事」でも「遊び」でも内、その他の活動であるということが多い。よって特に学習者にとっては、日常生活での制約が学習過程を阻害しないことが必須となるが、そもそも、その実態について

はほとんど分かっていない。

Kurosu & Takahashi (2002) は、webコースの受講者1名に対して、15分単位で1日の生活の記録を取ることを求め、学習に費やされる時間やタイミングなどを検討した。その結果、育児をしつつ学生であるこの受講生にとっては、学習に費やされる時間は不規則に分断されていることが分かった。

こうして、学習を継続するためには、日常生活でのことどもが学習過程をできるだけ妨害しないこと、さらには日常生活の中に学習が(ある程度規則的に)埋め込まれていることが必要条件となるであろう。

#### 4. 学習を継続することに及ぼす制約について：事例から

放送大学生からは、新しい発見や楽しみがあることが多く上がる。一方、各種のリソース(知人、図書、テープなど)が揃っている学習センターの利用しにくさへの不満も多く上がる。たとえば、学習センターの開館時間が短いので、有職者にとっては利用しにくいということである。しかし、これを逆手にとって、休日にテープをまとめて視聴するという方法を取ることで学習効率が上がる、ということもある。番組の録音・録画について、特にラジオ番組の予約録音をするための家電が不足している、というような家電メーカーへの批判も上がる。あるいは、たまたま自宅の近くに学習センターがあったので入学したという例も多い。これらは、学習が継続される基本的な条件である。

カナダのアサバスカ大の成功の秘訣の1つは、このような学習者のニーズを把握し、学習者へのサポート体制が充実していることがある。また、遠隔学習では、学習者のコミュニティーが形成されやすいが、これも学習の継続に役立っている。これらは、教授者や経営者が常識として持っていなければならない意識であろう。経営者や教授者は、学習者についての日々の研究を怠ってはならないのである。

同じく、カナダのTechnical University of British Columbiaは新しいe-learning機関として開校されたが(1999)、BC州政府が左派から右派に変わったのがきっかけとなり、主に財政的な理由から閉鎖され、Simon Fraser Universityに移行された(2002.4)(より詳しい分析は、小林ら(2003)を参照のこと)。我が国においても、行政改革の一環としての国立大学等の独立行政法人化が目前であり、他人事ではない。たとえある1つの大学が閉鎖されても、学習を継続することができるための基盤整備は必要である。

#### 5. おわりに

学習を継続するための条件には、学習者の個人的な条件(動機づけ、習慣形成など)から、教授者・経営者の意識やサポート体制作り、そして、学校機能が存続し続けるという国や地方自治体の教育政策、までと異なるレベルでの条件が折り重なっている。それらの条件が制約となり、学習者は、その日常生活において(遠隔)学習を行っている。

## 引用文献

- 小林登志生・山地弘起・川淵明美・高橋秀明・永岡慶三 2003 カナダのバーチャル大学ーTechBCに関する調査報告 日本教育工学会第19回全国大会講演論文集. 471-472.
- Kurosu, M. and Takahashi, H. 2002 Obtaining realistic information on the context of use of e-learning system. E-Learn 2002: World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, & Higher Education. Moreal, Canada.
- 高橋秀明 2001 遠隔学習過程の記述：Webに基づいたコースの場合 日本教育心理学会第43回総会発表論文集. 4.
- 高橋秀明 2002 遠隔学習過程の記述：放送に基づいたコースの場合 日本教育心理学会第44回総会発表論文集. 423.

## (注)

本論は、以下に加筆修正したものである。

高橋秀明・黒須正明 2003 遠隔学習過程の記述：学習を継続すること  
日本教育心理学会第45回総会発表論文集. 429.

本論の一部は、平成14年度放送大学教育振興会助成「遠隔学習過程の記述：ケースによる比較研究」および文部科学省科学技術振興調整費「横断的科学によるユビキタス情報社会の研究」の補助を受けた。